様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４２０６７２

研究課題名（和文）メッセネの劇場のスカエナエ・フロンス―建築装飾の様式分析とその建築史的位置づけ

研究課題名（英文）Scaenae Frons of the Theatre at Messene - Stylistic Analysis of Architectural Ornamentation and its Identification

研究代表者
吉武　隆一（YOSHITAKE, Ryuichi）

熊本大学・大学院先導機構・准教授

研究者番号：７０４０７２０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：重要なヘレニズム都市であるギリシアのメッセネ遺跡の劇場は、ローマ時代に大規模な改築をうけ、舞台建物がローマ風の三層構造となった。舞台前面のスカエナエ・フロンスは当初2世紀半ばと推定されていたが、建築装飾の分析からさらに1世紀近く遡る1世紀中ばの建造であり、より厳密にはクラウディウス帝からヴェスパシアヌス帝（41～79年）であることが明らかになった。オーダー各部に施された建築装飾はギリシアや小アジアに広く類例が見られ、中でもフリーズや柱頭の装飾は、いずれも1世紀後半のギリシア本土で流行したモチーフであることが明らかとなった。このことは1世紀におけるローマ建築と地方様式との関係を示唆している。

研究成果の概要（英文）：The Theatre at Messene, which is one of the important Hellenistic city in mainland Greece, was converted into Roman theatre building. Three storied scaenae frons has been dated to between the middle of the second century and the third century AD by the excavator from uncertain evidences. The stylistic analysis of the architectural ornamentation demonstrates that the scaenae frons dates not to the middle of the second century but to the middle of the first century AD. In addition, based on the same analysis, it is confirmed that the Roman theater of Messene was influenced not by the west including the city of Rome but rather by mainland Greece or Asia Minor. The ornamental motif of the frieze and the capital of the scaenae frons was commonly used in the second half of the first century AD of the mainland Greece, but not in Italy. This fact indicates the relationship between Roman architecture as a new building type and local tradition in Greece and Asia Minor.

研究分野：工学

キーワード：メッセネ　劇場　スカエナエ・フロンス　建築装飾　地方　ギリシア　１世紀

１．研究開始当初の背景

ギリシアの古代メッセネはヘレニズム期を代表する都市遺跡の一つで、1987 年から地元の考古学者テメリス教授によって継続的に発掘が行われてきた。研究代表者は熊本大学を中心とする建築調査グループの一員として、1999 年から継続的に調査に参加してきた。2007 年からは、研究代表者が実質的な調査責任者としてメッセネの古代劇場の調査と研究を行っている。メッセネの劇場はローマ時代に入ってから大規模に改築されたが、アルカイック期からヘレニズム期までのギリシア建築の研究が主流であったギリシア本土では、ローマ時代の建造物の研究はやや立ち遅れている。

図１　メッセネ劇場の舞台建物遺構

こうした中、代表者は現地にて当該劇場の実測調査を行い、写真、実測図等で資料を作成し、これに基づいて建物の推定復元を行った。その結果、劇場建物のうち、ローマ時代の舞台建物は 3 層構造であることが明らかになったが、その歴史的位置づけを考察するには、建立年代の確定と類例との比較分析が必要である。そこで本研究では、建築装飾による様式分析を行い、建立年代の推定と類例との比較分析を行うことにした。

２．研究の目的

本研究の目的は、古代メッセネの劇場のスカエナエ・フロンスについて、これまでの現地調査で得られた資料を基に、ギリシア本土および小アジアのローマ劇場や類似する建物のファサードの建築装飾と比較し、詳しい様式分析を行うことである。さらに可能な限りイタリアのローマ劇場とも比較を行う。建築装飾の様式分析を通して、当該スカエナエ・フロンスの建設年代を推定するとともに、建築装飾から見たメッセネのスカエナエ・フロンスの特徴が明らかになることが期待できる。また近年の研究動向として、発掘調査の進展に伴い、ギリシア本土におけるローマ建築の研究が盛んになりつつあるが、本研究におけるメッセネのローマ劇場の分析が一定の寄与を果たすことが期待できる。

３．研究の方法

本研究は、現地調査に基づく方法と文献資料に基づく方法の双方から構成される。メッセネ劇場のスカエナエ・フロンスについては、すでに現地調査を行っており、十分な資料の収集と観察が済んでいる。比較する類例については、可能な限り現地で観察し、写真で記録を作成した。また建築装飾に関する文献研究では、オーダー各部の装飾モチーフや地域毎の研究、発掘者による個別の研究など、これまでの研究成果を可能な限り収集し、建設年代の推定根拠を可能な限り確かめつつ、メッセネの事例と比較する方法を取った。

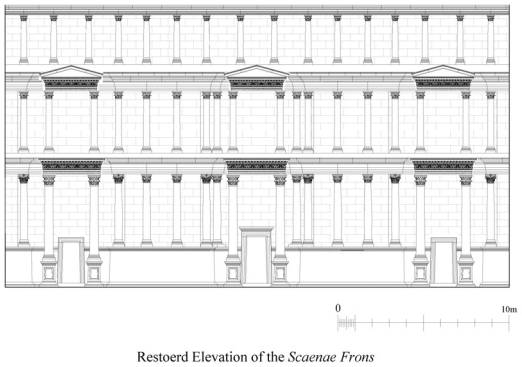

図２　メッセネ劇場のスカエナエ・フロンスの推定復元図

４．研究成果

ギリシア古代都市メッセネで発見されたローマ時代の劇場は、近年発掘されたばかりの遺構で、ヘレニズム期の遺構の上にローマ時代の建物が増築されている。ローマ時代の舞台建物の正面に相当するスカエナエ・フロンスの建設年代は、これまで発掘者のペトロス・テメリス元教授による後 2 世紀半ばから後 3 世紀という見解だけが知られていた。その根拠は、スカエナエ・フロンスの発掘で出土した彫刻と碑文の多くが、後 2 世紀半ばのものと編年され、とりわけ 2 体の彫刻がトライアヌス帝とハドリアヌス帝とに推定されたことにある。しかし、これらの彫刻には碑文があったとの報告もなく、頭部が発見されていないことから、二人の皇帝のものであるとする根拠は不十分である。また、彫刻の存在は劇場の使用時期を示唆するが、最初の建設年代を直接特定する根拠にはなり得ない。発掘時の層位、コイン、陶器などの考古学的資料は 2012 年現在まで公開されておらず、建築年代については不明な点が多い。しかし、筆者がスカネナエ・フロンスの建築装飾を様式的観点から分析したところ、後 2 世紀ではなく、むしろ後 1 世紀後半の特徴を持つことが判明した。

スカエナエ・フロンスは、大理石造の三階建ての建物であった。ペデスタルまたはポデュウムの上に立つ円柱は、アッティカ式のイオニア式柱礎の上に色大理石または玄武岩の円柱を乗せ、コリント式、ロータス・アカンサス式の 2 種の柱頭を置いた。

（1）柱礎

メッセネのアッティカ式柱礎は、上から順にトルス、スコティア、トルスの繰形をもち、その下に矩形の礎盤（プリンス）をおき、コリントのバビウス・モニュメント（1 世紀前半）やベマ・コンプレックス（1 世紀半ばより前）に近いがスコティアの堀がやや浅く、コリントの「捕虜のファサード」(1 世紀後半）に近いことから、1 世紀後半と考えられる。

（2）コリント式柱頭

メッセネのコリント式柱頭は、大理石造でどっしりとしたベル型のカラトスの周りに薄いアカンサスの葉が 2 段あり、その間からわき出るカリクスからは内渦巻きと外渦巻きが伸びている。カリクスの頂部には 2 枚のアカンサスの葉がある。メッセネのコリント式柱頭は 2 世紀のハドリアヌス時代（117-132 年）よりも 1 世紀後半の柱頭と類似点が多い。ハイルマイヤー（Heilmeyer 1970）によれば、1 世紀半ばよりまえのギリシア本土におけるコリント式柱頭は、カラトスが大きくアカンサスの葉が薄い。小葉の間にある穴は円形よりも三角形ないし水滴形であることが多い。またアカンサスの葉から上部は植物装飾で埋め尽くされることが多い。これらの特徴はいずれもメッセネのコリント式柱頭に共通する特徴である。類例としては、コリントの南バシリカの柱頭（41-54 年）、同「捕虜のファサード」の柱頭（69-79 年）、同レカイオン通りの柱頭（81-96 年）、アルゴスの浴場＝劇場の柱頭（1 世紀後半）、スパルタの劇場の柱頭（68 年）が挙げられる。このように、メッセネのコリント式柱頭はおよそ 41-79 年頃の 1 世紀半ばの特徴を備えている。

図３　メッセネ劇場のコリント式柱頭

（3）ロータス・アカンサス式柱頭

ロータス・アカンサス式柱頭は、スカエナエ・フロンスで最も多く用いられた柱頭で、1 階から 3 階まで使用された主要な柱頭である。ロータス・アカンサス式柱頭とは、1 段目がアカンサスの葉、2 段目がロータスの葉で構成される柱頭である。アテネの風の棟（前 37 年以前）で用いられたのが最初で、アゴラのアグリッパの音楽堂（前 15 年頃）ですぐに採用された。1 世紀になるとディオニソス劇場の舞台建物（66/7 年）でも使用された他、スパルタの劇場からもロータス・アカンサス式柱頭が報告されているほか、スパルタの港町として栄えたギテイウムのアゴラからも多数出土しており、いずれも 1 世紀後半と推定されている。メッセネのロータス・アカンサス式柱頭は、これら 1 世紀後半の柱頭と酷似している。

図４　メッセネ劇場のロータス・アカンサス式柱頭

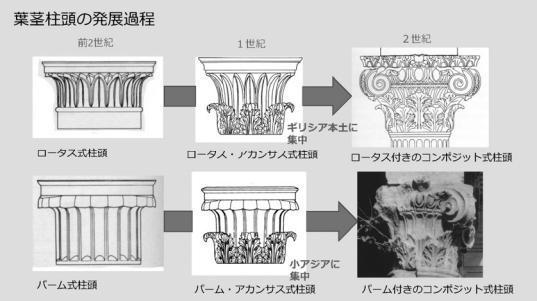

図５　葉茎柱頭の発展過程（ロータス式柱頭（上）とパーム式柱頭（下））

メッセネのスカエナエ・フロンスの大きな特徴であるロータス・アカンサス式柱頭は、ペルガモンに始まる前 2 世紀のロータス式柱頭に起源を持つと考えられ、1 世紀にギリシア本土で流行したロータス・アカンサス式柱頭を経て、2 世紀にはコンポジット式柱頭の中に取り込まれた。ロータス式柱頭はペルガモンのデメテールの神域のストアやプロピロンに最初の例が見られる（前 2 世紀）。2 世紀のコンポジット式柱頭の例としては、エフェソスのケルススの図書館（113-117 年）やペルガモンのアスクレピオス神域の北ストア（123-138 年）など、小アジアに多くの事例がある。このロータス式柱頭の系譜とは別に、パーム式柱頭の系譜があり、アテネのエウメネスのストア（前 180-160 年）やアッタロス II 世のストア（前 2 世紀半ば）で最初に用いられた。パーム・アカンサス式柱頭は、

ロータス・アカンサス式柱頭ほど好まれなかったようで、ミレトスのニンファエウム（79/80 年）やペルガモンのトラヤネウム（112-129 年）に現れるまで類例がない。2 世紀に入るとコンポジット式柱頭にパームが持ち込まれた事例が現れ、アンタルヤの記念門（131 年以降）がその例である。このようにロータス・アカンサス式柱頭は、2 つの葉茎柱頭の一種と考えられ、主に 1 世紀のギリシア本土で流行したモチーフである。

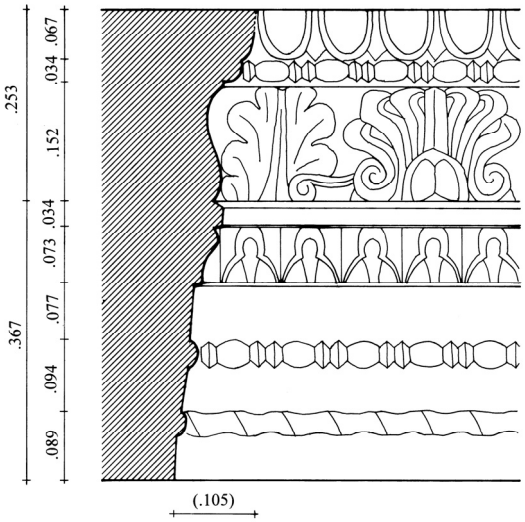

図６　メッセネ劇場のアーキトレイブ・フリーズ部材の実測図

（４）ねじり模様

アーキトレイブは 3 段のファスキアからなり、下から 1 段目と 2 段目の間にはねじり模様がある。その断面は円形で、一定間隔でねじれている。ルムシャイド（Rumsheid 1994）によれば、ねじり模様は古くはアウグストス帝の頃から見られる。アーキトレイブにあるよく似たねじり模様は、スパルタの劇場（66/7 年）やコリントの「捕虜のファサード」（66/7 年）のアーキトレイブにも見られるから、メッセネのアーキトレイブもほぼ同時期と推測される。

（５）アストラガル

またファスキアの下から 2 段目と 3 段目の間には、アストラガルが施されている。アストラガルは広く知られた装飾モチーフで、フォン・ヘースベルグ（von Hesberg 1983）によれば、アウグストス時代から 2 世紀にかけて好んで用いられた。メッセネのアストラガルは、楕円形のビーズと分厚いリールから構成され、円形のビーズと薄いリールで構成されるアウグストス時代のアストラガルとは明らかに異なる。むしろコリントの「捕虜のファサード」やレカイオン通りのアストラガル、スパルタの劇場のアストラガルと酷似している。反対に、2 世紀のギリシア本土ではアストラガルは見られない。したがって、メッセネのアーキトレイブは、1 世紀後半と推定される。

（６）レスビアン・キーマ

アーキトレイブの最上部にはレスビアン・キーマの繰形がある。レスビアン・キーマはアストラガルと同じくアウグストゥス時代から 2 世紀まで広く用いられたモチーフで、ハート型の葉と S 字型断面を持つ。おそらくアテネのアクロポリスのエレクテイオンに起源を持ち、ヘレニズム期を通して好んで用いられた。メッセネに近い類例はスパルタの劇場のアーキトレイブのレスビアン・キーマである。

図７　コリントの「捕虜のファサード」１階のエンタブラチュア

図８　スパルタの劇場のアーキトレイブ・フリーズ部材

（７）フリーズ・パルメット

フリーズのパルメット（ロータスとアカンサス）は、メッセネのスカエナエ・フロンスの中でも重要な建築装飾モチーフである。8 枚の小葉からなるロータスと、7 枚の小葉からなるアカンサスとで構成される。シュトロッカ（Strocka 2010）によれば、パルメット装飾のあるフリーズは、ローマ帝国の中でもギリシアや小アジアなどの東方でよく用いられたが、首都ローマにおいてはトラヤヌス－ハドリアヌス帝（2 世紀前半）の頃まではほとんど用いられず、むしろ植物模様の装飾が好んで使われた。ギリシア本土における初期のフリーズ・パルメット装飾として、アテネのアウグストスとローマ神殿の円柱ネッキング（前 20-19 年）コリントのバビウス・モニュメント（1 世紀前半）があるが、メッセ

ネのパルメットと特徴が異なる。同様に小アジアにもアンティオキアのアウグストス神殿のレイキング・コーニス（前 27-後 37 年）やシデのヴェスパシアヌス帝のモニュメント（71 年）があるが、特に後者はパルメットの間隔が長く、メッセネとは特徴が異なっている。ここでもコリントの「捕虜のファサード」とスパルタの劇場のフリーズ・パルメット装飾がきわめてよく似ている。さらにオリンピアの「アスリートのクラブハウス」のフリーズ・パルメット（81-96 年）もメッセネの例に酷似している。このようにメッセネのフリーズ・パルメットは、1 世紀後半の 50 年代から 90 年代の間と考えられる。

（８）舌葉模様

コーニスのデンティルの上部には舌と水葉の装飾が見られる。同様のモチーフをコーニスに用いた例は、コリントの北西ストアの入隅のコーニスと、レカイオン通り沿いの大浴場のコーニスにも見られるだけで、類例が少ない。

このように、メッセネの劇場のスカエナエ・フロンスは、後 1 世紀後半であることがほとんど確実であり、厳密にはクラウディウス帝の頃（41-54 年）からヴェスパシアヌス帝の頃（69-79 年）にかけて、すなわち後 1 世紀半ばから第 3 四半期の終わりまでのものと考えられる。このスカエナエ・フロンスの新しい編年は、メッセネにおけるローマ時代の建設活動が後 2 世紀半ばではなく後 1 世紀後半であったことを示しており、これはメッセネ市内のアルシノエの泉水場の再建の時期（67/68 年）とも一致する。

さらに、メッセネの劇場が、都市ローマを含むイタリア以西よりも、ギリシア本土や小アジアの強い影響下にあることが、分析の結果からはっきりした。これまでカエサルによるコリント入植（後 44 年）以降、ギリシアでは都市ローマの強い政治的影響を受けたと考えられてきた。本研究による分析結果は、アッティカ地方とペロポネソス半島において、少なくとも後 1 世紀末ごろまでは、ギリシアや小アジアの建築的＝文化的伝統がなお強く残っていたことを示している。すなわちハドリアヌス帝以前の 1 世紀後半には、すでにギリシア各地でローマ建築の建設ブームが到来していたが、建築装飾の観点から見れば、大抵の場合はヘレニズムまでさかのぼる伝統的な装飾モチーフが好まれたことが伺える。ギリシアにおけるこの保守的傾向は、ネロ帝のギリシア訪問（後 66/67 年）ともおそらく関係しているだろう。なおイタリア半島における同時期の建築装飾との詳細な比較検討は今後の課題となった。

参考文献

1. Heilmeyer 1970: W.-D. Heilmeyer, “Korinthische Normalkapitelle - Studien zur Geschichte der Römischen Architekturdekoration,” *RMEH* (Mittelungen des Deutschen Archaeologischen Instituts, Romische Abteilung) 16, Heidelberg, 1970.
2. Von Hesberg 1983: H. von Hesberg, ”Zur Datierung der Gafangenenfassade in Korinth,” *AthMitt* 98, 1983, pp. 215-238.
3. Rumscheid 1994: F. Rumscheid, *Untersuchungen zur kleinasiatischen Bauornamentik des Hellenismus*, Mainz, 1994.
4. Strocka 2010: V. M. Strocka, *Die Gefangenenfassade an der Agora von Korinth – Ihr Ort in der römischen Kunstgeschichte*, Leipzig, 2010.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

1. R. Yoshitake, “Stylistic Analysis of the Architectural Ornamentation and Dating of the *Scaenae Frons* of the Theater at Ancient Messene,” 日本建築学会計画系論文集, No. 684, 2013, pp. 485-495.（査読あり）
2. R. Yoshitake, “A New Reconstruction of the *Scaenae Frons* of the Theater at Ancient Messene,” 日本建築学会計画系論文集, No. 691, 2013, pp. 2055-2065.（査読あり）
3. R. Yoshitake, “Early Applications of Domical Vault in Jordan,” 日本建築学会計画系論文集, No. 693, 2013, pp. 2387-2397.（査読あり）
4. R. Yoshitake, “Architectural Survey of Early Domical Vaults in Jordan,” *AL-RĀFIDĀN*, Vol. XXXVI, 2015, pp. 65-81.（査読なし）

〔学会発表〕（計５件）

1. R. Yoshitake, “New Reconstruction of the *Scaenae Frons* of the Theatre at Messene,” ETEΠAM, 4th International Symposium, November 27, 2015, TEI, Thessaloniki, pp. 152-155.
2. 吉武隆一、「メッセネのローマ劇場のロータス・アカンサス式柱頭とその類例」日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、東海大学相模キャンパス、139-140 頁、2015 年 9 月 6 日
3. 伊東龍一、吉武隆一「アーティスト参加型の授業改善プロジェクトー造形表現における総合的なものづくり力の開発ー」日本工学教育協会、第 63 回年次大会、九州大学伊都キャンパス、58-59 頁、2015 年 9 月 2 日
4. 吉武隆一、「メッセネのローマ劇場の緞帳について」、日本建築学会研究報告. 九州支部. 3, 計画系（54）、熊本県立大学、597-600 頁、2015 年 3 月 1 日
5. 吉武隆一, 「ギリシア型劇場の客席にお

ける天幕について」、日本建築学会研究報告. 九州支部. 3, 計画系 (53)、佐賀大学、565-568 頁、2014 年 3 月 1 日

〔その他〕
熊本大学西洋建築史研究室ホームページ：
http://www.arch.kumamoto-u.ac.jp/yoshitake_lab/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
吉武 隆一（YOSHITAKE, Ryuichi）
熊本大学・大学院先導機構・准教授
研究者番号：70407203